

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一冊一頁）
昭和二十四年四月二十八日運輸省特別換取證第三五二號
昭和三十年二月二十五日印刷 昭和三十年三月一日發行

第二十一卷

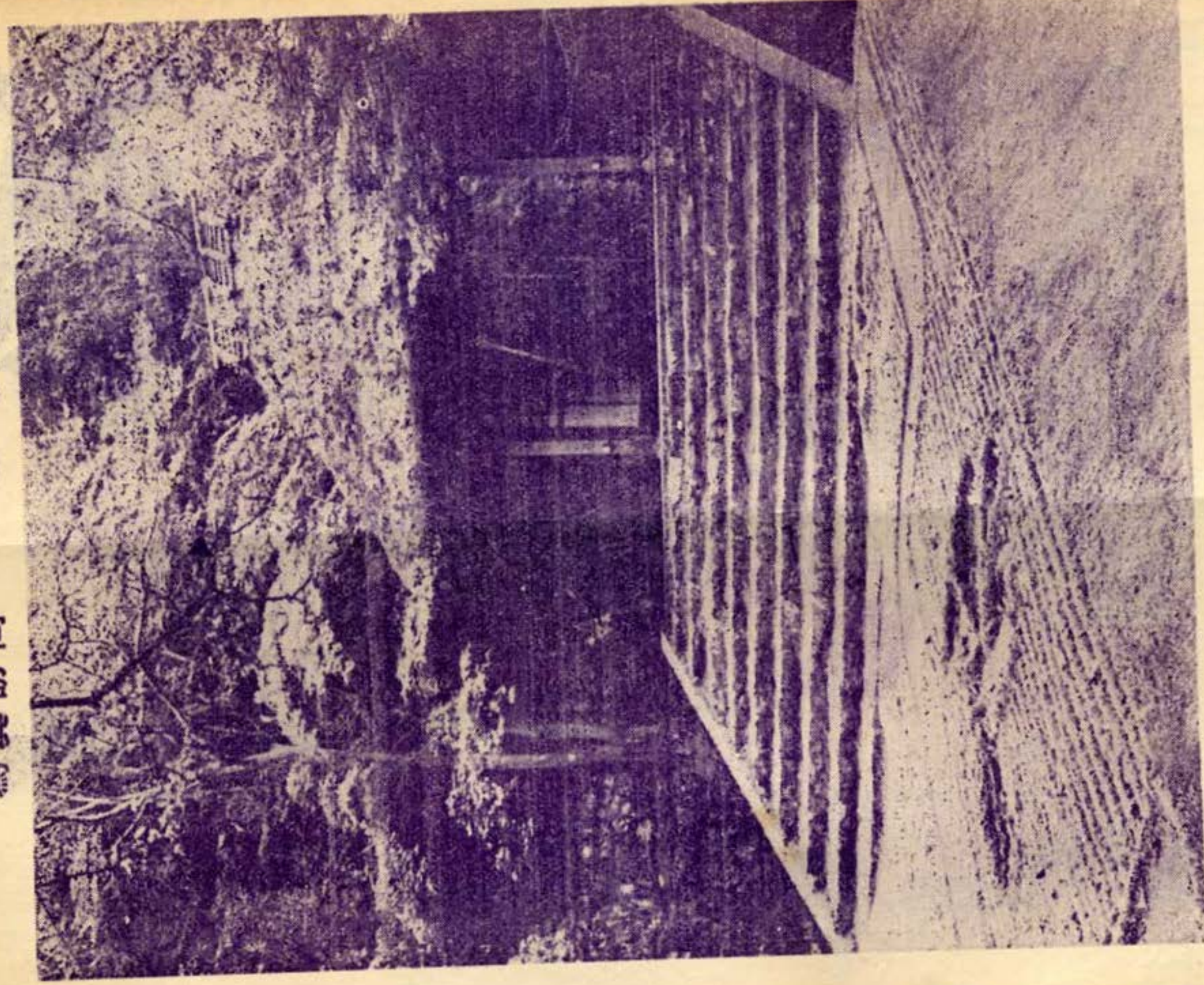
三月號

淨土



三月號

三



まこと茅門は閑寂なこの寺の象徴とも云えよう。こゝ法然院は寺名の通り七百有余年前、元祖法然上人が念佛を修せられた由縁の處。以來幾多の榮枯盛衰を経て、鎮まる諸堂を深く藏し、殊に茅門は上人在りし日の面影を残し、四季を通じて訪ふ人の心を温めてゐる。寺門を入つては菩提を求むる心があつて欲しい。門一步して清碧谷に響き、梵唄峯に應ふる念佛の道場に、俗塵を拂はれんことを至念至禱する。(京都・法然院提供)

卷 頭 言

颯田本眞尼は布施の行者として名があつた。このあたゝかいところの所有者は、いつも弟子達に、笑つてはならないと、いましめていられたという。この人のこのいましめは私を感動させた。こゝろをひそめて、深く人生をみつめる者には、そしてまた荒れ狂う人の世に思をひそめる者には、聲高らかに笑つていられる餘裕とてはないのではないか。たゞそのわびしさと、かなしさとに、おろおろと、こゝろをふるわさすには居られないのではないか。しかし、本眞尼はいつも顔に、ほゝえみをたゝえていられたという。

このくにの初期の佛像のみ顔に、ほゝえみがたゞよつてゐることは、ひとびとの知るところである。後期の佛像は概ね冷たく、とりすまして居られる。本來の佛像は、ほゝえみ給うのではないか。「いつくしみの眼、もろびとをみる」と、經典によまれらる。み佛のほゝえみは、決して高らかの笑いではない。人と人の世のかなしさ、哀れさをひろくつゝみ、超えて、ほゝえみ給うのではないか。本眞尼のほゝえみも、このみ佛のほゝえみに通ずるものがあるのではないか。平和のさけびには賛成である。しかし、眞の平和のさけびは、佛者のほゝえみを通して初めて生れるのではなからうか。

(佐藤良)

浄 土 三 月 號 目 次

卷 頭 言	(1)	東洋人はかく考える(2)……鈴木大拙(5)
遍 路	吉田絃二郎(2)	宗 教 人 晩年の西行……折原教詮(11)
如法に生きる	中野尅子(9)	ハイライト 童話 逃げた小猿……山田巖雄(17)
近 詠 五 句	獅子谷如是(15)	史話 白隠禪師と山賊長四郎……藤田和彦(22)
小説 木曾亂入	鶴田湛泉(27)	浄土會員のページ……(16)
薄命の佳人祇王	中村かね(20)	祖 德 諷 詠……澤田岳潤(32)

このやうにかれらは九州の吉利支丹大名の一族にあたりいはゞ貴族の豊かな生活に馴らされて育つて來た人たちであつたが、よくも生死を賭けた長途異郷の旅へおもむいたものだと思はれるなかにも伊藤祐益と千々石清左衛門は近ごろ父を失ひ、母一人を残して鵬程萬里の旅にいたのである。或る一人の母は愛子の船出を見るに耐へないといつて自殺をしようとした。

少年たちの念頭にはいつもまだ見ぬローマの莊嚴があつた。この世ながらの天國の音楽があつた。少年たちは弱かつた。しかしローマを想ふ時、怒濤もあらしもなかつた。

人生は旅である。無限の旅である。今夜は東西南北からたどりついた旅人たちは宿の一つの燈の下でみんなが語り明かしてゐるが、明日の夜が明くればふたゝび東に別れ、西に離れて、ふたゝび相逢ふことはない。永遠に。

吉右衛門丈の後を追ふやうにして大阪の壽三郎丈が亡くなつたと思つてゐたら、つひ、このころ河原崎權十郎丈が他界した。權十郎はわたくしが一昨年の夏狭心症を起した時、狭心症の藥を教えてくれたが、つひに自分も心臓を病んで歿くなつた。

はなやかな舞臺の上で、五十年六十年の間踊り、踊つてわたくしをよろこばしてくれた名優たちも考へて見れば、一夜一夜の旅の遍路であつた。

殊に死とともに一切を放擲して何もかも残さず、散つてしまふのがいかにも遍路らしくてうらやましい。このごろ、或る人がたづねて來て吉右衛門丈の話から未亡人のことに及んだところ

「奥さんは廣い邸にたゞ一人でをられます。おさびしいことでせう。」と語つてゐた。

はなやかな舞臺に日毎幾千人の人たちを賑かに、よろこばせてゐた名優の未亡人だけに、お氣の毒といふところがしみじみと感じられた。

東洋人はかく考へる (2)

文學博士

鈴木大拙

四 自由は東洋に

今自由と云う事を申しますがこの、自由に對して私の考へは一般の人の考へと一寸異つたものがある。それは近ごろはアメリカでも西洋でもやたらに自由と云う事をきくが、その實本當の自由は西洋の人の考え方からは出てこないもので、自由はどうしても東洋にあると云うのが私の考へ方なのです。

(5)

元來日本では自由と云う言葉をつかうが、自由の元のリバイとかりベラルテイとか云うこの様な字は元來積極的な意味をもたないで消極的であつて何から解放されるとか何から解脱するとか云う様に今迄縛られていた状態から解かれるとか、人から制約を受けていたものから受けなくな

るとかで、自由とは我々日本人の解している様な意味でなく、元のリバイとかりベラルテイにしても消極的な意味だと私は思う。

なぜかと云うと、東洋の我々明治の始めからこの言葉を使つたと思うが、元この自由とは佛教の方から來た言葉で自ら據ると書いてあるので獨立と云う意味になる。すべてが自分から出てくる、この自分とは人とか我とかの差別の自分でなく絶對の立場の自分で、その自分が自分として働き出るこの自分が自由と云う。それはいわゆる永遠性無限性そのものから出てくる自由性で、物が分れて時間になつて論理で制限され、法律で制約されて行くところから出てくるリバイとかりベラルテイでなく元から我々のもつてゐる自由の働き、自由自在の働きと云う様なそれが本當の自由でなくてはな

このやうにかれらは九州の吉利支丹大名の一族にあたりいはゞ貴族の豊かな生活に馴らされて育つて来た人たちであつたが、よくも生死を賭けた長途異郷の旅へおもむいたものだと思はれるなかに伊藤祐益と千々石清左衛門は近ごろ父を失ひ、母一人を残して鵬程萬里の旅にいたのである。或る一人の母は愛子の船出を見るに耐へないといつて自殺をしようとした。

少年たちの念頭にはいつもまだ見ぬローマの莊嚴があつた。この世ながらの天國の音楽があつた。少年たちは弱かつた。しかしローマを想ふ時、怒濤もあらしもなかつた。

人生は旅である。無限の旅である。今夜は東西南北からたどりついた旅人たちは宿の一つの燈の下でみんな語り明かしてゐるが、明日の夜が明くればふたゝび東に別れ、西に離れて、ふたゝび相逢ふことはない。永遠に。

吉右衛門丈の後を追ふやうにして大阪の壽三郎丈が亡くなつたと思つてゐたら、つひ、このころ河原崎權十郎丈が他界した。權十郎はわたくしが一昨年の夏狭心症を起した時、狭心症の藥を教えてくれたが、つひに自分も心臓を病んで歿くなつた。

はなやかな舞臺の上で、五十年六十年の間踊り、踊つてわたくしたちをよろこばしてくれた名優たちも考へて見れば、一夜一夜の旅の遍路であつた。

殊に死とともに一切を放擲して何もかも残さず、散つてしまふのがいかにも遍路らしくてうらやましい。このごろ、或る人がたづねて來て吉右衛門丈の話から未亡人のことに及んだところ

「奥さんは廣い邸にたゞ一人でられます。おさびしいことでせう。」と語つてゐた。

はなやかな舞臺に日毎幾千人の人たちを賑かに、よろこばせてゐた名優の未亡人だけに、お氣の毒といふところがしみじみと感じられた。

東洋人はかく考へる (2)

文學博士

鈴木大拙

四 自由は東洋に

今自由と云う事を申しますがこの、自由に對して私の考へは一般の人の考へと一寸異つたものがある。それは近ごろはアメリカでも西洋でもやたらに自由と云う事をきくが、その實本當の自由は西洋の人の考へ方からは出てこないもので、自由はどうしても東洋にあると云うのが私の考へ方なのです。

(5)

元來日本では自由と云う言葉をつかうが、自由の元のリバイとかりベラルテイとか云うこの様な字は元來積極的な意味をもたないで消極的であつて何から解放されるとか何から解脫するとか云う様に今迄縛られていた状態から解かれるとか、人から制約を受けていたものから受けなくな

るとかで、自由とは我々日本人の解している様な意味でなく、元のリバイテイとかかりベラルテイにしても消極的意味だと私は思う。

なぜかと云うと、東洋の我々明治の始めからこの言葉を使つたと思うが、元この自由とは佛教の方から來た言葉で自ら據ると書いてあるので獨立と云う意味になる。すべてが自分から出てくる、この自分とは人とか我とかの差別の自分でなく絶對の立場の自分で、その自分が自分として働き出るとこの自分が自由と云う。それはいわゆる永遠性無限性そのものから出てくる自由性で、物が分れて時間になつて論理で制限され、法律で制約されて行くところから出てくるリバイテイでなく元から我々のもつてゐる自由の働き、自由自在の働きと云う様なそれが本當の自由でなくてはな

らない。

私どもの生活でもこうして生きている限りは自由は客觀的にえられるものではなく、自由とは我々の主觀的生活の上に於いて始めてもつものなのである。自由と云う事が云われるのは自分と云うものの本當の意味に於ける自分と云うものを見る事が出來てそこで始めて自由と云う事が云われる。そうでなく自由と云うものはいくら、自由々と云つてもそれは相對的なもの又は、消極的なもので決して本當の意味の自由ではないのである。

西洋の人の消極的な意味をもつた、このリベラルティがかえつて東洋の人によつてその元の譯、言語の中にもつていない意味が自由と云う譯字の中にもられて來たところに甚だ面白い消息をつたえていると云つて良からう。西洋の人のいうリベティの元は繫縛から離れるというものであるのに對し、東洋の人の自由とは繫縛とか、束縛であるとか限定からでなく、自分自身から出て動くその自分とは絶對的な意味をもつた自分であるが、その様なものから出て動くと云う事は今迄のこのリベラルティで考えられていたよりもつと深い意味が出てくる。そこに本當の人間の自由が體得される。一般に自由々と云われているものは決して自由ではなくして、その實甚だ不自由極まるものであるが、

それを意識しないでいるところに西洋の人のまだ考えの未だ至らないところがある。その點については東洋の人の方が西洋の人よりづうつと進んでいるとは云わないまでも深い處に根ざしている、と、こう云つてよからう。

この深いところをどうしても手に入れないと我々は、本當の人間の生き方について諒解が徹底しないと云つてよい。そこに東洋人は東洋人として西洋人と異つた區別される考え方もつてゐる。今東洋の人の考え方が本當の自由と云う言葉から出ていると云うと、多くの人は、自由なんかはこれは西洋から學んで來た事で東洋になんか本來ないと云うかもしれないが、それは甚だ考えの至らないところで本當の自由は東洋の方にあつて、そして、その自由の自由はこれはいくら繰返しても構わないと思う。が相對的な意味をもつた自己ではなく、絶對性をもつた自己、そして絶對性をもつた自己であるから自由と云う事が云われるのであつて、その自由を云い得るまでに未だ自覺していなくて、それを自覺させるだけのものが吾々東洋人の中にある。それが一番大事であると私は信じて疑わない。

その自覺を我々東洋人として益々強めねばならない。たゞ自由々と云つて政治的自由、經濟上の自由とか道德性の自由とかは本當の自由ではなく、それは皆相關性をもつ

たものである。絶對性の自由とは東洋の人の考え方、生き方の底に自らあるものである。それを自覺する處に眞の自由がある。單なる相對性の自由は消極的でこれは話にならんとするであります。

五 力によらぬ本然の自由

こゝでもう一つ東洋人の考え方と西洋人の考え方の異なる一例を上げたいと思う。これは、力の考え方で、力の考えとは、二つのものが互いに對抗してゐてその間に一方のものは一方のものを征服する、その様なところに力の考えが出ると思ふ。

この征服の考は元東洋には無かつたものなのです。近頃日本などで征服と云う言葉をやたらに使う様になつたのはこれは日本の人の西洋かぶれの考えを知らず／＼にもつたもので、そうして本來自分のもつてゐるものを失うとする私の恐れてゐることでもあります。

この征服とは力に連關して來るもので、これは西洋の人の不思議と知らず／＼の中に出て來る言葉で、西洋の人の考え方とは、先に申した個人的な道德的責任を重んじてゐるその一方にはどうしても力を考えないとこの様な事は出て來ないと思ふ。

そこはどうかと云うと自分の行つた事に對して責任をもつ事であるがこの責任とは、甚だ、あやしい事でどの様な事を責任と云うか、まあ政治的にも、道德的にも色々な意味がある。しかし、責任とはまだ／＼深く考えねばならない。金で辨償するとか、それを責任を果したと云う事、何か悪い事をしたとか罰金を取られるとか、或いは牢屋に入られるとかで、責任を果したと云う事になるかもしれないが、しかし行つた作爲は何も消えていない。それは永遠にのこるし、責任をとると云う事は何んの意味も無い事で政治家などがよく責任をとりますとか、責任でこうするか云うが、その責任とは甚だわからん。役人が役をやめたところで、それで、損害を生じたものが元の通りになる譯ではないし、役人のやめた事が自分の行つた行動に對して責任となつていても、それが何んの意味かわからないし、それから國と國との條約にしても、責任とはどんな事で責任をとるのか、結極金の事か又政治上の利權、經濟上の權利の譲り合ひで形がつく様に思れる。これも力の對抗に依り生れて來るものであります。

本當の責任とは、力が出る所、力にならない先に行つてみて、そこに自分本來の存在の自覺をもつ、そこに責任が本當に出て來るのです。唯責任呼ばわりはいつも云う自由

々々と同じ意味で、結極何らの意味もなさない。で、これは本當の力の出所に自覺がないと力の表れた上での制裁とか責任とか云うので、未だ力の表れない先に對しての自覺をもつ所に本當の自由とか責任とか考へられるようになる。

つまり力の表れた所から論じないで、未だ、力の表れない先の所に一つの自覺をもつところに本當の力の意味がわかる。又、それに依り力を使うと云う事に於ても力に使われる力でなくして、力をつかつて行く、すなはち、力の無い所に本當の力をもつ事にならないとパワー力と云うものをいくら云つても本當のものにはならない。

今日云う表れた力をたよりにそれを使うと、それを使う事は自分の自由であると考えられ、本當の力は力に表れない先から出て来るので、そこに自覺をもつ時始めて自由の力が出て来る。力とは使れない所に本當の自由がある所に本當に力の表れの根本があると思うのです。その力の出所自由の出所、力の本源にはどうしても自覺が必要である。

この絶對の自覺をもち得るのは東洋の人の考え方がそこから出ているし、東洋の人にしてはじめてその考へがもてるし、又今迄の歴史の上に我々が自覺しなくても自覺し得

る事跡を残しているから、それをたよつて今日の我々は東洋的考え方がどんな所に在るか云う事を大いに自覺せねばならない。

東洋的考えと云うものを今迄漠然としていたが、それを深くする所に自覺が深まるし自然、世界全體の人間のいき方に大いに貢獻するものをもつていと深く信じて疑わない。

F.F.D.特選幻燈機(荷造送料500圓)

マスター S 300 100V 300W	14,500 圓
マスター・ルツクス 100V 500W 冷却装置付	24,800
エルモ 100V 300W	16,500
ニコレット C 型 100V 300W	14,500
デラックス 75V 750W	48,000

本會代理取次

會員にかぎり一割引にて、御取次致します。一報カ
タログ送ります。

如法に

生きる

中野 剋子

銀行や、デパートの金銭出納係をやつて居

る人は、毎日お金の山の中に埋つて居ても、あれは自分に勝手に使へぬ金だから、金の中に埋つて居て、毎日金無しで泣いて居る人があります。實際、お金を一日中扱つて居ても「お金」と云う感じがせぬそうです。お金で無いことではないお金であるが、それは今謂うた通り、自分に使へぬ金だから、自分の金ではない、自分の金で無い金は結局物品で、紙屋さんが紙を数えて居るのと同じです。数や額は間違えてはならぬから、正確に叮嚀に何度も数えて居るが、自分に取つては直接関係のない、死んだ金です。

月の終りになつて、月給として貰う金は僅か二萬圓足らず、千圓札にすると十幾枚だが

ら、日頃数えて居る大きな札束に較べたら、ほんの一枚で張合いないこと限らないのぢやないかと思つて心配して訊ねたら、それはそうではない百圓札一枚でも、これは「活きたお札」で歸りに牛肉百匁でも買つて行ける、これは正真正銘自分が使へる自分のお金で、大切なお金ですと言われる。一と月の間には何億の現金を扱いながら、正味自分の手元握る金は僅か二萬圓かと思うと、人のことでも氣毒になつて、何だか本當と思へぬ氣がします。

丁度大洋の中へ漂流して居る人が、大海の水の眞中に居り乍ら、飲料水に窮して一滴も飲む水が無い。目の前の鹽水を呑んだらよさそうなものだが、それを呑んだら最後、次から次へと渴を覺えて、終に海水を呑み過ぎて死ぬそうです。だから水の中に居つて水が飲めぬ。水の上に浮いて居て一滴も水が無いのとよく似て居ります。これを餓鬼とでも申しますか、私達も他人の事と笑えぬ。十人が十人、「幸福」の中に居つて幸福がわからぬ。どちらを見てもお金の山、水の海であるのに、ソレが身に着けられぬ。目の前に見て居り乍ら、それがどうしても自分のものにならぬ、皮肉なことです、悲慘なことです。

幸福と云うものがどこにあるか、「救ひ」がどこにあるか、如來さまがどこに御座るかと探す必要は無い。目の前の總てがソレです。ソレの中に居り、ソレの上に浮び、ソレを手につけて数えて居り乍ら、ソレがソレでない。皮肉の至り、悲慘の極みです。自分のものにならぬものを無理に手に盗つたら、すぐ手が後へ縛り上げられます。鹽水も飲んでいようになつてから飲めば藥用にもなるが、渴して居るがまゝで呑んだら生命を失う。幸福はどこにも在つて、これを取上げるだけの用意が出来て居らぬ時は、どうしても幸福にならぬのです。そして身を苦しめる材料、幸福は決して幸福になつて居らぬのでないが、決して幸福ではありませんせぬ、皮肉です。金であつて金でない。水であつて水でない。鶏卵は榮養があります、御飯でも、果實でもさしみでも榮養が有ります。榮養が有るがそれだからと云うて生卵を一度に十個、ミカンを一度に二十、御飯を十杯、おさしみを十人前などと喰べたら一度に下痢です。榮養どころか、大變な發熱をして三日も四日も寝てしまふ。卵も御飯も果實も皆、確かに榮養のあつた儘であるが、喰べ方が悪かつたのです。病氣上りの衰弱したカラダに急に一度に

喰つたから、ブリ返へしたのです。即ち榮養と云う事は、消費吸収する程度に度を計ることです。寫眞も「度」を計つてピントを合わせりや判つきり映るが、ピントが合つて居らなんだら、何が何やら薩張りわからぬ。即ち幸福も——救ひも——如來も——眞如の法則に基いてピントを合して覗けばハッキリ寫つて来る。目の前の一切が幸福であり、お慈悲であり、自分のものになつて、自由に使へるやうになる。

「幸福」は總てが幸福であつたのです。確かに宇宙の大法、其儘が「如來」であつたのです、森羅萬象總ての動きが、如來様の活動そのものであり、戸迷うと善い悪いの、幸福だ不幸だと騒ぎ立てて益々わからなくなるが、自分の内から「信眼」を開いて、自分が「法」となり、「眞理」になると、一切の眞如界が如實に開いて、實に明瞭に幸福の中に居り、救ひの中に居つたのです。貧乏の儘で千圓札が一枚も自分の自由にならなくとも、これは銀行の物だから仕方がない、それが當然で、自分の物以上に大切にする。何も不安も動揺も悩みもなく、極めて平明な率直な事です。食物で云うなら、どんな山海の珍味が目の前にあつても、喰べてならぬと思つたら

少しも欲しくもない。自分は梅干とお粥で済まして、コレでいいこれが一番結構だと満足しぬく。これが「悟り」で、これが常識です。「常識」が救ひで、常識がお慈悲で、常識が如來さまです。非常識な水を浴びたり、十萬億土坂方まで鐵のワラヂで極樂を捜しに出掛けんならぬ事が、何も宗教ではないのです。釋尊は「如法如法」「如是如是」と仰せられて、所謂「大平凡」に徹せよ、それが非凡だ。邪凡に墮したり、無茶凡になつたら、それは無凡だ。凡易、凡俗、平々無爲がいゝ。高處は高平、低處は低平」と云う言葉があります。高いのは高いのが當り前で別に威張る程の事もなく、低いのは低いのが儘で、別に悲觀する必要もない、高低は高低の儘で高下が無い。自ら安じて、高位の時は高位らしく振り舞ひ低位の時は低位らしく振舞ふ、それが當然でいゝ事だと云うのです。お金の有る時は有るらしくお金を有効に費い、無い時は無いらしく、無い方法で片付ける、それが「お救ひ」であり「お浄土」であり「お念佛」です。

いくら口でお念佛を申しても肚がお念佛になつて居らぬから、少しも有難くない、今は有難く無いが死んでから有難くなるだろう——なんて、薩張りわからぬ事で片付けて居るから

宗教は何か「まじなひ」か、死んでからでなくてはわからぬことにして居るのです。神祕と云う事は「わからぬ」と云う事でなくて、わかり過ぎて今迄解つて居ると思つた以上明瞭な事だから、喜んで神祕だ、靈感だ、奇蹟だと云うのです。奇蹟だから容易に無い事、靈驗だから滅多に出遇へぬ事でなく、誰の上にも平々凡々に現はれる、當然すぎる程當然な「大自然法」であります。

親鸞聖人も「阿彌陀佛は自然の様を知らさしめんが爲めの料なり」と云つて居られます。大如法の理に従つて行員は行員として忠實にお金勘定をして、月末には二萬圓のお月給を頂いて、その収入の範圍で貯金もし、生活を賄つて行く事が、恰も銀行業務の如く正確な人が、本當に行員らしい行員の人です。病人は病人らしくしてトン／＼病氣が活るものなら活つて行く事が養生人です。別に神とか佛とか云うものを拜み倒して、ソコから特配か特別サービスを受けようなこと心懸けたら、正確な人間生活ではなくなつて來ます。如來の本願は吾が胸の内にまで回き、いや吾が心底から盛り上つて、今現に私を活かしつゝあるものでなくては、彼此の悲願が相應したものでは無いです。天地の大法に歸依して「如法に生きる——」此の一語に私の信仰は盡きるのです。(布教家)

晩年の西行



折原教詮

人——教——宗

治承四年十二月二十五日平重衡は南都に發向、二十八日七大寺已下を灰塵に歸してしまつた。

兼實は藤原氏の鎮守の地であり、故郷でもある南都の慘狀を耳にするや、「心神屠るが如し、……この時に當つて、たちまち我氏の破滅を見る。……およそ佛寺堂舎日域に滿つ

といへども、東大興福延暦園城、これを以て宗となす。しかも天台兩者（延暦、園城）においては、度々その災に遭ふ。南都諸寺にいたつては、いまだかくの如きことあらず。惡運の時に當り破滅の期を顯すか。まことにこれ時運のしからしむることなりといへども、當時の悲哀、父母を喪ふよりはなはだし。」と述べて、天を仰いで泣き、地に伏して哭いてゐる言葉にも増して、その有様は慘憺たるも

のであつた。

保元三年御讓位後落飾せられ佛門に入られた後白河法皇は、清盛とともに東大寺にて受戒、法住寺に一千體の千手觀音像を安置せられ、又嚴島や熊野に御幸あらせられる等御宗教生活の傍ら、俊成に『千載集』の撰進を命じ給ひ、御自ら『梁塵秘抄口傳集』を撰び、歌道の御奨勵に、歌舞音曲への御精進と、御藝能生活に御盡力あらせられてをられたが、南都の災變を聞かれるや翌養和元年八月には東大寺の再興を、仁安三年唐より歸朝、後南無阿彌陀佛と號して法然上人の門下に列なつた俊乗坊重源に勅せられた。重源は法皇の勅によつて立願し、九月には洛中諸家を廻つて勸進をはじめ、院をはじめ奉り上下より多くの奉加を得、南都の復興もその緒についた。

二

兼實は長寛二年閏十月より日記『玉葉』を誌し始め、政争擾亂のまつただ中に在つて、公家の棟梁として閥閥や合戦を赤裸々に叙して公家の安泰と、社稷の平穩とを願ひ、弟慈圓は台密法燈の中心となつて、叡山内外に吹

きすさぶ嵐の中に宗教にたより、將又『拾玉集』に編まれた歌の數々の示すが如く、和歌によつて道ある世、道理の實踐を祈念して止まなかつた。

俊成は前名顯廣を改め、御白河法皇はじめ仁和寺覺性法親皇、慈圓等の御後援、御庇護のもとに歌會、歌合にますます令名を得、『長秋詠藻』を著はし歌壇の巨匠と仰がれるに到つた。その子定家も治承四年に『明月記』を記しはじめ『世上亂逆追討雖滿耳不注之、紅旗征戎非吾事。』として、いよいよ歌道に精進し、養和元年には二十歳の若年にして『初學百首』をものしてゐる。

西行の親しく交はつた歌の師友は、有爲轉變極まりない現實を直視しつつ都に在つて強く天下の靜謐を願ひ、或は政争を他處に、詩魂にのみ沈潜してゐたのである。北面の武士より出離得道した西行は、都を離れ、久安の中頃から治承四年の春まで、高野山を中心として生活してゐた。

『五輪九字明秘密釋』をはじめ、數々の著書論說等に明かな如く、覺靈出でて密嚴淨佛國土を唱へ、密教と淨土門との教學上の新課

題について、一大轉機に立ち到つた直後の野山に西行は入つたのである。西行が覺靈の寂後その遺徳を慕ひ、密嚴淨土を欣求したであらうことは十分に想像し得る。

野山には西行と關係の深い御室仁和寺の覺性法親王も、法統の關係上折々入後あり、覺性の御法弟宮法印元性（覺惠）歌僧琳賢・兼賢などをられ、それ等の方々と西行は親しく交はつた。

治承四年六十三歳の春、三十年の高野中心の生活から離れて、伊勢國二見の浦の山寺に定住することとなつた。晩年の久しい間を何故に神宮に程近い二見で過ごしたか。和光同塵・本地垂迹の時代的信仰によつて、大神宮のかたじけなさにひきつけられたことは「かたじけなさに涙こぼるる」といふ、人口に膾炙してゐる一首によつても明かであり、又この伊勢の地には神宮の祠官荒木田氏良や僧侶の間に、西行の歌弟子の少なくなかつたによるのであらう。

保元・平治の亂を高野の山房から觀過した西行は、この地で源平のはげしい鬭争、平氏の滅亡を靜かに觀たのである。保元・平治の

亂そのものに關して一首の歌も詠んでゐない。治承——文治の間、長明をして『方丈記』を記さしめた程の大火・饑饉・旋風・地震等についても全く歌つてゐない。都を離れてゐた爲であらうか。將天災とあきらめてしまつた爲であらうか。

文治二年の頃、この地に在つて西行は、當時を代表する歌人慈圓をはじめ寂蓮・隆信・定家・家隆等に勸進して百首歌を詠ましめたのである。

三

重源の勸進の功大に擧がつて、文治元年には莫大の費用を以て大佛像の補鑄修理も成り、開眼供養が行はれた。未だ大佛像の造營は遅々として進まなかつた。翌年から更に大佛殿造立の勸進が行はれ、その年の初秋には齡六十九歳の西行は重源との約に従つて、大佛の沙金勸進の爲に伊勢の地を後にし、遙かみちのくの國平泉へと海道を下つた。康治二年二十六歳の時から四十四年後、曾遊の地への再度の出立であつた。

丁度その前後、賴朝に追はれる義經は多武

峯に、叡山に、或は京邊にありとの風聞しきり、その年十一月十八日には再び義經追捕の宣旨が下つた。西行は海道を経て平泉へと、義經主従は西行と同じく、大佛殿造立勸進の山伏となつて、諸關をあざむきつゝ北陸路を平泉へと旅してゐたのである。

八月仲秋の日鎌倉に着し、總追捕使頼朝の招きによつて謁し、歌道を問はれたが西行は道ならずとして語らず、かつての瀧口武士として弓箭の道をば語つて、大いに面目をあげたことが『東鑑』文治二年八月の條に詳述されてゐる。翌十六日鎌倉を發つて、冬十月十二日平泉に着いてゐる。

四

鎮守府將軍藤原秀衡の方に寄寓し、その日折からの雪の中を衣川の砦を一見し、とりわきて心もしみてさえぞれたる

衣川みにきたるけふしも

の一首を『山家集』に留めてゐる。當時平泉の地は、沙金をはじめ豊富な物産を擁して、秀衡が一大勢力を敷き都の戦亂騷擾なるにひきかえ、都の文物を模倣輸入し、絢爛たる文

化の華を咲かせてゐたのである。

西行にあこがれ杜甫を偲んだ俳人芭蕉が、奥の細道の旅にこの平泉の地を訪れたのは初夏であつた。

さみだれの降り残してや光堂

藤原三代の榮華も重花一朝の夢と消え去り、古の趣を傳へるものはわずかに光堂のみ。かつて、西行が雪の降るに訪れた砦の蹟に立つた芭蕉は、

夏草やつはものどもの夢のあと

の絶唱を詠じてゐる。

保元・平治の兵亂も、安元の火災も、饑饉も地震も、人心を轉動させるあれ程の大事事件の連續に遭つて、一首も詠じなかつた西行は頼朝の擧兵以後の戦亂を、

世の中に武者起りて西ひんがし北南い

くさならぬ所なし。打續き人の死ぬる數きく夥し、まこととも覺えぬ程なり。

こは何事の争ひぞや。あはれなることの様かなと覺えて、

死出の山こゆる絶間はあらじかし

亡くなる人の數續きつゝ

又

沈むなる死出の山川みなぎりて

馬後もやかなはざるらむ

と詠じ、冷淡に酷評してゐる。五千餘首を數へ得る繁多な西行歌中、兵馬弓箭を詠ぜしものは、この他わずかに數首を數へ得るに過ぎない。——不思議なことである。

西行出家の動機について、族人憲清の暴死に遇ひ惕然として開悟したなどという類の出家譚は小説に屬する。或は學者説を立て、「この問題は西行傳記の中でも解決最も困難な問題である。それだけに又いかようにも説をなし得よう。愚案によれば當年の世相に基く一般厭世觀と政治的原因となつて、これに悲痛なる戀愛が點火したためと觀察し度い。」とこれに明確な解答を與え得ないことはいふ迄もない。

西行が紅旗征戎を好まざること定家と同様であつたことは、先の事實が物語つてゐる。自然風物を詠ずるの他、好んで宗教歌——釋教歌をものしてゐる。この宗教歌への執着は高野に庵居し、神都に住して、佛を詠じ世の無常を詠み、經典を歌にあらはし、或は神を念じて自歌集を神宮に奉納する等、斷を重ね

るにつれてますますはげしくなつてゐる。その願ふところは、和歌を以て讃佛乘の因とすることにあつた。慈圓の和歌を以て道理ある世を念ずる心と相通するものがある。

平和を願ふ切々たる西行の氣持は、求道心となつて北面武士より出離せしめた。然し漸く萌して來た和歌への執着は捨てきれない。といつて俊成・定家の如く公家の庇護の下に都に在ることは、身分こそ低けれ、同族の掣縛から離れ得べくもなく、又求道心がそれを許さなかつた。——こんなところに出家の眞因があるのではなからうか。

一心に平和を念じ、無常を詠じた西行の精神は、夏草しげる同じ衣川の舊蹟に立つた芭蕉の心にも盛者必滅、榮枯盛衰の相——權勢爭奪の夢の中に、はかなく散つていつた「つはものども」をまざりと想い起こさせたであらう。

義經はこの年の末頃、秀衡の館に身をかくしてゐるはずである。西行は翌文治三年櫻花の頃まで滞在してゐたのであるが、秀衡にしろても、朝朝に謁して來た程の西行にあはせる譯がない。こゝに史劇第二の『勸進帳』は、

永遠に何人にも書かれる機縁を失つてしまつたのである。三月出羽最上郷瀧の山まで行き九月『千載集』奏覽の頃都へ歸つたらしい。

五

俊成の撰んだ『千載集』には、慈圓の六首に對し西行の歌が撰入され、非常に感激してゐる。

この年自己の新舊の作を整理し、歌合に仕立て、『御裳瀧川歌合』の判を俊成に、『宮河歌合』の判を定家に求め、前者を内宮奉樂の爲に、後者を外宮法樂の爲に奉納してゐる。

六

文治五年には、河内石川郡弘川寺に引籠つた。翌六年（建久元年）二月十六日

願はくは花のもとにて我死なむ

その如月の望月のころ

と人口に膾炙した自歌に違はず、彼岸櫻咲きそめ望月の光うるはしいころ、釋尊入滅の日と時とを同じうして世を去りたいと念じたその願の如く、日は一日異なるが、七十三才の生涯を閉じて寂滅の世界に入つたのである。

その入滅が、十念乱れず立派であつたことは、慈圓の『拾玉集』巻第五に、

文治六年二年十六日未の時圓位上人臨終なとまことにめてたく存生にふるまひ思はれたりしに更にたかはす世の末にあり難きよしなむ申し合ひける其の後詠みおきたりし歌とも思ひ續けて寂蓮入道の許へ申し傳へし

君知るやそのきさらきといひ置きて

詞に送る人の後の世

風になひく富士の煙にたくひにし

人のゆくへは空にしられて

ちはやふる神にたむくるもしほ草

かき集めつゝ見るそかなしき

これは願はくは花のもとにて我死なむそのきさらきの望月のころとよみ置きでそれに違はぬことを世にもあはれがりけり又風になびく富士の煙の空に消えて行方も知らぬわが思ひかなもこの二三年のほとに詠みたりこれそわか自讃歌と申ししことを思ふなるへし……

と述べてゐるに明かな如く、「願はくは……」の歌は文治二年みちのくの旅の初、富士を詠

近詠五句



獅子谷 如是

見せ合へる霜焼の沙彌胼の沙彌

俸せを心に刻し冬ぬくし

寺深く笹鳴きを聞き添水さゝ

重ね着の上に法衣や後夜上堂

又一つ咲きぬ四温の白椿

める歌と共に、この二三年の程に詠まれた歌であり、西行自讃の歌であつたことが知られるのである。

西行寂滅の報が傳はるや慈圓・俊成・寂蓮・定家等の師友は挽歌を詠んでその菩提を弔つてゐる。友人に關しては殆んど歌を詠むことのなかつた俊成も、西行の示寂には特に心を惹かれたのであらう、

願ひおきし花のもとにて終りけり

蓮の上も違はざらむ

の一首を詠みて追悼してゐる。西行の滅後十六年元久二年に奏覽された『新古今集』にはその何れの作者にも増して九十四首も撰入されてゐる。

和歌を以て求道の因とし、讃佛乘の因として、眞言密宗に歸依した西行が、西方淨土に大往生をとげたのである。元祖法然上人の専修念佛門開宗の直前であつた。

(正大出身・國文學研究者)

× × ×

浄土への

たより

いつかの眞野先生の短章かみしめて幾度も拜見しました。次いで編輯後記を讀み、巻頭言、それから吉田先生の星のささやきのやうな言葉を味つて讀みました。貴兄と佐藤君との御協力で吉田先生の御風貌に接する事が出来たのは何よりも結構です。どれほどあこがれてゐたかも知れません。

(大阪府泉南町 鶴田湛泉)

× ×

私はこの數年來冬の間は病床にあり、お十夜もお寺詣りも出来ぬ身でございますが、浄土誌のおかげで、お念佛申し、諸先生方のお話をくり返し拜見いたして佛恩の廣大なるを知らせて頂いております。

さて本日筆をとりましたのはアメリカ

がビキニ事件をお金で解決した事で反省の模様もなく、第二回の試験もするらしく殊に場合によつてはバクダン使用の用意ありとか、大型バクダンを沖繩に貯蔵してるとか、ラヂオで聞きまして實に憤りを感じます。日本人の物心兩面に受けた打撃はどんなものかアメリカ人は分らないのでせうか。以後地球上では絶體使用禁止ののろしを佛教徒が上げ、全日本人一人残らず立上り世界に訴へたら止める事が出来はしませんか。老婆の願でございます。

お寒さの折柄どうぞお體御大事に御法の爲益御活動下されますよう、お願申上ます合掌。

(佐賀県多久市多久原 於保郁)

× ×

トラク新刊正信へのみちびき有益に拜見、正法興隆の爲御努力合掌、……(中略)……尙他の同志にも宣傳する關係で、まだ餘分ありませんか御伺い申上ます。

(東京都龜戸町四東覺寺 小宮勝憲)

× ×

『正信へのみちびき』大變結構でございます故、至急右追加注文致します。……

(東京都北清島町浄正寺 大原良雄)

× ×

俳句

一茶忌に招かれ行く雪の山
夜警番鐘の音遠く去りて行く
花の日を土に待ちあふる草根かな

(長野県松川村 丸山錫峯)

會員のたよりを御待ち致します。
御送金の拂込票の通信欄でも、ハガキでも何でも結構です。近くの行事、人の動き、感想、批評等御寄せ下さい。

宛先

東京都港区芝公園五ノ十
法然上人續仰會
浄土へのたより係

逃げた小猿

— 童 話 —



山 田 巖 雄

大きな貨物船が大西洋を、西に向つて走つていました。
「ウオーツ。」

海の上では珍らしい、ライオンの大きなウナリ聲です。

「ほう、スゴイのが乗つていますナ。」

船のお客さまが、思わずそっくりしました。

そばにいた肩幅の廣い、ガッシリした身體つきの船長の大きな聲が答えました。

「この船には、まだほかにもインド象と、日本産の熊とそれから恐ろしい毒蛇のコブラも乗つていますよ。——もつともみんな頑丈なオリに入つてますから、危ないことはありませんがネ。」

「その獸たちはどこへ行くのです。」

「アメリカの動物園ですよ。この船は今までにも、ずいぶんいろ／＼な獸を、あつちこつちの國へ運んでいますよ」
「あぶないことはありませんでしたか。」

「その點は充分注意もしていますし、たびたびのことで運び慣れている上に。大事な生き物のことだから、大抵飼育係が付いていますから、まず心配はありませんわい」
ここでチョット言葉を切つた船長は思い出したように、
「そう／＼。たつた一度小猿のために、ヒドク弱らされたことがありますよ。——ナニ、ほんのチョットしたはづみの出来事でしたがネ——實は、たかが小猿と思つて、こつちが油斷をしたのがイケなかつたので——あり合せた木のオリへ入れておいたのが、間違いのもとでした。」

と、船長さんが話し出しました。

× × ×

インドのカルカッタの港から、三十四匹ほどの小猿を、

六つの木のオリに入れて、船底へつみこんだ船は、地中海を通り、大西洋を横切つてアメリカへ向いました。

オリの中にはインド産の猿、アフリカ産の猿、日本産の猿などがいて、

キャツ、キャツ　く　く

と毎日にぎやかなことでした。

あと六日でボストンへ着くといふので船員たちは久しぶりで上陸の出来る日を指折り數えて、喜んでいました。その日は朝から海が荒れていたので、

「今日は浪が高いから、氣を付けろ。」

と、船員たちは、その方に氣をとられていました。

ドーツ

と押しよせてきたいきわ大きな大浪に。船はヒドク傾いて、船の中の人たちはあぶなく横倒しになるところでした。

そのはづみに、猿のオリが互いにぶつかり合つて、こわれてしまつたのです。

ただでさえ、ヂットしてられない小猿が、このシケでこわがつて、いつもより騒いでいたところでは

オリがこわれたからタマリません。

我がちにオリから出て、船の中ちゆうを逃げまわりました。

「オーイ、猿が逃げたぞオ。」

「そつちへ行つたぞ。」

「つかまえろツ。」

「つかまえようとしても、うつかりすると、齒をムキ出した猿に

キャツ、キャツ

とヒツかかれそうです。

「あぶない。」

よけるすきに、上甲板へ出た小猿は、甲板の上を走り廻つています。

高いマストの上へよちのぼつた猿。

ブリッジにチョココンと乗つてゐる猿。

煙突の上には、煙でまつくろになつた猿が、キョトンとした顔付きで、目と齒ばかりを光らせてゐる始末です。

「ヤー、お猿の船長さんが出来たぞオ。」

という笑い聲に、見ると、船長室へ入りこんだ猿が、船長の帽子を頭にのせて、テーブルの上にシャガンで、こつちを見えていました。つかまえようと、ロープを持つて追いかけると、眞ッ白い齒をムキ出して怒ります。

「何とかしてつかまえろ。」

「ヒツかかれて、けがをするな。」

あり合せたズックでグローブのような厚い手袋を作つて厚い外套を着こんで、猿をつかまえようとする者、袋を持つてくる者、アミを振りまわして猿をつかまえようと

する者、投げ縄をつかおうとする者、いろ／＼やつてみましたが、猿はなか／＼つかまりません。

追われて高いマストの上から、帆づなの上へとび移る拍子に、船がゆれたために、甲板の上に落ちて死んだ猿もありました。

そのうちに夕方になると、猿もおなかのすいたとみえて、餌をさがしに、二三匹の小猿が、オリのそばへやつてきました。

「ソラ、やつと二匹だけつかまえたぞ。」

「早くオリへ入れろ。」

そういわれて気が付いてみると、まだ、オリはこわれたまんまです。

「誰か早くオリを直してくれ。」

それからあわてゝオリを作り直すさわぎでした。

はじめの日には、やつと五六匹つかまえただけで船の中ちゆう上を下への大騒ぎをしたする、やつとのことで、逃げた猿をみんな捕まえるまでに、丸三日もかかりました。

× × ×

「いや、全く、小猿だと思つて、のんきに構えていたばつかりに、これには一番こまらされましたわい。」

船長さんは思い出してもおかしいというように、大きな聲で笑いました。

(童話家・魚籃幼稚園長)

大正大學々生募集

一、人員 大學院 [佛教學(二〇〇)宗教哲學(一〇〇)]

文學部 [哲・史・文・社會各學科四〇]

佛教學部 [佛教學科(四〇)]

二、出願期日 一次 一月十一日—三月六日(學部)

二次 三月九日—三月二十七日(大學院學部)

三、入試期日 一次 三月七日、八日(學部)

二次 三月二十八日、二十九日(大學院學部)

四、詳細は入學案内參照(入學案内は宛名明記封筒及三〇圓封入大學事務局入試係へ)

東京都豐島區西巢鴨四丁目五三〇

大正大學

大正大學高校(夜間)生徒募集

○募集人員 第一學年(普通科)(一二〇)

第二、三、四學年(補缺若干)

○圖書受付 二月一日より選拔試驗前日まで

○資格 第一學年(新制中卒程度)

第二、三、四年(相當の年齢學力あるもの)

○試驗期日 三月二十八日

王祇人の佳命薄



ね か 村 中

蘇東坡の詩に、古より佳人薄命多しとあるが白拍子祇王もまたそのうちの一人である。

白拍子は今の藝者のようなものである。十九歳の時、平家全盛時代に太政大臣清盛に寵愛せられ西八條の清盛の館に召され、母親には

家屋を新築し毎月米百石と錢百貫をおくられ豪奢の生活をして居たから京都中の評判は大したものであつた。うらやむ者はこれは祇と云ふ文字をつけたから幸せがよいのだらうといつて、祇一とか祇二とか又は祇福、祇徳など改名したものもあつた。

月日の立つは早いもので三年を経過したとき、加賀の國の生れで佛といふ白拍子が生れた。頗る舞が上手で京都で之が又大評判になつた、年は十六であつた。佛は、私の名は知らぬ人が無い位であるが今天下に聞ゆる太政大臣の入道さまに召されぬと云ふはまことに残念である、白拍子のならひこちらから推しかけて行つて見ようと、西八條の館へ参りて當時都にきこえて居ります佛御前でありますと申入れた。清盛は白拍子などは人のよぶによつて来るものであるこちらには祇王が居るに推しかけて来るとはけしからんと云はれた。佛はしほしほと歸らうとするとき、祇王は白拍子が参りますは世間普通のこととて御座ります折角来たものでありますからたとひ舞を御覽にならなくても御對面だけしてやつてくだされば本人も満足して歸りましやうにと

申た。清盛がそれではあつてやろりと、佛に、祇王が申すによつて對面した、あつた上からは今様の一つでも聞こうかと云うと君をはじめて見るをりは、千代も歴ぬべし姫小松。御前の池なる龜岡に。鶴こそ群れて居て遊ぶめれ。

と、くりかへし／＼三返歌つた、その聲と云ひ節廻と云ひ、その巧妙なるに一座の人々を驚かした、清盛もお前は今様も上手である、舞も上手であらふ一番見せよと、鼓うつ者をよび、一番舞されたるに、佛御前は髪かたちは申に及ばず、ほれぼれするような美人であつたから、好色の清盛は佛に心が移つてしもうた。佛が再三辭退するもこれは祇王が居るから、佛が辭退すると思ひ、祇王すぐ出て行けと三度も使を立てられた、祇王は三年も住みなれし處であるから後を奇麗に片付け御立に

もえいつるも枯るるも同じ野への草
何れか秋にあはではつべき

と一首の歌を形見として書き残し去つた。京都の人々は、祇王が清盛よりいとまが出たと云ふを聞きわれも／＼とまねいたが、祇

王は閉ぢこもり外へ出なかつた。

あくる年の春のころ、清盛より使が来て、佛御前が退屈して居るから今様をうたひ、舞など舞て、佛をなぐさめよと言はれた、祇王は返事もせなかつた、清盛はなぜ返事せぬか来るか、來ぬか、清盛に考へがあると云はれた、母親は是を聞いてかなしみ、祇王にさめく縁言を並べて進めるに、親の命には背きかたしとて、一人行くもあまりにかなしいからと妹の祇女と他に白拍子二人總計四人で西八條へ行つたが常の座敷よりは遙に下りたる所へ通された、清盛は佛御前が退屈して居るから今様を歌へと云はれ

佛も昔は凡夫なり。我等も遂には佛なり。いづれも佛性具せる身を。隔つるのみこそかなしけれ。

と泣く／＼二度くり返し歌ひたれば、清盛も時にとつて神妙であるとされた、これからは始終參つて今様を歌ひ、舞を舞ひ、佛御前をなぐさめよと云はれた、祇王は親の命に背かじと來たもののつらい思ひをした、この世にあるならば又々どんな憂目を見ることであらふから、今は身をなげて死なうと思ふといへ

ば妹の祇女も姉さんが死なば私と共に死ぬと云ふ、母親は二人の娘が死んだ後は年寄りが残つて何とならう、しかしまだ命のある母に身をなげさすは、五逆罪に當るぞと、かき口説けば、さらば自害はとどまりましよう、しかし都の内に居れば又うき目を見やうから、今は都の外へ出やうと云ふて、祇王二十一歳にて尼となり、妹の祇女十九歳にてさまをかへ、母親も四十五歳にて頭を剃り、嵯峨の奥なる山里に、柴の庵をむすび一向專修に念佛して後世を祈つた。

その年の秋の初の夕暮どき、竹の編戸をほと／＼とたゞき、佛御前が訪ふて來た、お住ひの御様子と所を聞きましたので、入道殿(清盛)にお暇を願ひましたが御許がないので、こんな風にて參りましたと、かつぎたる衣をのけて見れば、尼の姿であつた、祇王は、お前さまはわづか十七であるに、かやうに穢土を厭ひ、淨土を願ひ、深く思ひ入れ給ふはまことの大道心と思ひまする、嬉しい善知識であります、諸共に淨土を願ひましよう、四人一所に草庵にこもり、朝夕佛前に花香を供へ、念佛三昧に終つた。

後白河法皇が、六條の御所の内に、長講堂と云ふ佛堂を建てたまひ、御心をつけたま

へる者は、尊卑を問はず、過去帳に入れ菩提を弔はせ給へる中に祇王、祇女、佛、とち(母親)の四人も書き入れられた。

岩波寫眞文庫の京都案内に出ている、藤原定家卿の百人一首を撰ばれた、小倉山のふもと、所謂奥嵯峨に祇王寺がある、祇王、祇王隱棲の址である。

先年祇園の名妓、照葉とか、照菊とか云ふが、祇王寺で尼になつたと云ふ、新聞を見た記憶がある、白拍子が、天子様から弔らはれ其址が七百年餘りの後の世まで、お寺となつて残つて居るは、當時の人の同情が子々孫々まで傳つたと云ふ一つの手本と云ふてもよい

清盛の遺骨は、當時福原の舊都、今の神戸市逆瀬川のほとりの八棟寺に葬つたといふが今はお寺も無い。

さしも榮華を極めた清盛と、清盛に捨てられた祇王と、今日から見て、どんなかんぢがおこるでしよう、平家物語の著者は、おごれるものも久しからず、唯春の夜の夢のごとし、たけき者も遂にはほろびぬ偏に風の前の塵に同じ、と書いて居る、私共も祇王のように心から南無阿彌陀佛を忘れぬよう心がけましよう

光明徧照 十方世界 念佛衆生 攝取不捨

白隠禪師とあご長長四郎



藤 田 和 彦

前號まで

白隠禪師は幕府の請により箱根に籠る山賊あご長一味を徳化されるべく赴れる。丁度、その頭目と會い、さんぐに之をほんろうされ、賊も手の下しようもなく、今は閉口して、前に平伏している。……

「イヤモ、斯うも自分の秘謀を見破られた上は、何をおかくし申しましようか。」

去る慶安貳年霜月、箱根の我が山寨にて、お恥かしい話だが俺つちも情熱にボーウとした時代がありやして、其節四十歳位の母親と十八九歳の娘と二人連れの旅人に目を付け、子分に命じて其の二人を、我が山寨に擔つぎ込ませ、娘を折檻して居る折柄、天から降つたが、地から湧いたか一人の武士に踏み込まれ、ひどい目に會わされました上、其の武士のために、とう／＼娘は取り還され、改心の印にと、右の小指を一本切り落されました。其の時の武士の強さと云つたら、底知れぬ強さがありやした。其の際地上に落ちて有つたのが、ソレ其の印籠で御座いやす。其の後、わつちの煙草入れに使つて居りやりした。」

「オ、さもあらう、其の時の武士はありや柳生十兵衛先生じやからの。」

「エ、道理で強いと思つた。」

「その柳生先生御所持の印籠こそは、辱けなくも將軍家から拜領の御墨付きの印籠であるぞよ。今お前は日蔭者じやによつて、人目にも付かずにすんで居たが、若しお前が娑婆に出ている人であつたら

忽ち御用が懸つて、お前の首は疾くに飛んで居る筈じや。」

禪師から真相の一步始終を聞かされて、あご長も慄え上がった。

「俺しにはお前達ちの謀略位は皆んな判つてゐるわい。」

此處まで来る途中にも山道にて一度ならず、二度までも俺しに襲いかゝつたであろうがの、それが成功しないために山の辻々に紙片を結び付けて、手下共に非常招集をして、此の鍵屋へ俺しを連れ込み、此處で俺しを殺して所持の小判を奪おうとする事が、お前達の最終の目的であらうかの。」

と、彼れ等の謀略意圖を激しく喝破せられた。

「今此の鍵家は勿論のこと三島の町は賊徒で一杯に固められているわい。それと云うのも山賊の親分のくせに、お前が未熟者だから氣の利いた仕事も出來ず、子分達ちの育成にも骨の折れる處から、俺しのような雲水坊主の持つてゐる金子にまで、目がくらみ奪らねばならぬお前の身の上も、思へば不憐でならぬわい。後生の爲に此の小判はお前に進める程に、サア受取るがよい」

と、ボンと小判貳百兩をあご長の前に差し出された。

あご長、恐畏して飛びしざり、

「ア、飛んでもないお尙さまの淨財を何んで俺つち等が持てまじやう、持つたら罰が當ります」

と、つき返してくる。

「何んじやお前は進ずれば返してくる。持つて居れば殺して迄も奪わんとする。一體お前の心理は何處にあるのじや、俗に云う天の邪鬼とはお前の事じや。しかし、もうわしには用の無いこの金子じやによつて、撒き散らすから唯人でも來て拾ろえ」

と、大音聲と共に小判を二階から地上目懸けて、撒き散らされた。

あご長大いに周章して乾分に命じ、今和尚さまが撒き散らされた小判は淨財だから一枚たりとも紛失せぬように拾い集めておれの手許へ持つて來いと、下知をした。ふたたび小判貳百兩がたちまち集つてきた。

「お前は詢に手數のかゝる事をする男じやの、一體お前が商賈にする山賊と、物資を大切にする冥加心とが、全然駆け放れているではないか、それでは物事は成就しない筈じや。」

「まづ俺しの云う道理を良く聽くがよい。」

凡そ人間生活と云うものは善道か惡道か、いずれのかの一途に徹底しなければ成功は六ッヶ敷いのだ。それにお前のは性は善でありながら、惡の道を往かうとして惱んでいるのが現状であらう。今からでも遅くはない。みほとけは汝を救はれるであらう。善根は善果を結び、惡根は惡果に嘆げくと、人間生活の基調と、因縁因果の法則を説得せられた。

山賊長四郎は禪師の因縁因果論を神妙に聽き入つていた。

「實に是も御座えやす。わつちも由緒ある武士の家に生れ、祖先は關ヶ原の合戦に東軍として徳川の爲に手柄を立てた家柄でありながら論行行賞に不平があつてからは、同志の間にも軋轢が生じて樂しまず、遂に由井正雪の門下に入り慶安貳年の反逆以來は次ぎぐと暗い途に足を踏み入れるやうになり、太く短かく世を渡らうと思つても、夫れも仲間の仁義や手下の育成の爲に迫られて、思つたやうなボロい仕事には成らず、結局が細く長くなければ盜賊稼業も成り立たぬ事を、近頃痛感させられるやうに成つて参りやした。そこで俺つちの心境も、惡做か、改善か今その岐路に立つて、迷ひ續けている現状で御座えやす。夫れかと云つて今俺つち一人が改心し正

業に立ち還ろうとしても、世間がオイソレと容認しては呉れずまいし、其の内に舊惡露見とくれば忽ち三尺高い木の空で洒し首は知れたこと、其れを思えば子分共の行末までが案じられ、悪い事とは知りながら、改心も成りがたく、かくの始末」

と、眞心籠めて悔悟の情を表はした。

あご長の語る一步始終を聴いて禪師も、

「オ、左もあらう、更に今一言聞かして置きたい事がある、お前達の運命も最早や盡きて居るぞよ。殊に子分の内そこな韋駄天と勘太の兩人は三十日以内に羅目が近かづいてゐるぞよ。」

あご長初め乾分の者も禪師の予斷を聞いて慄え上がった。

悪人なれども人間の心境に差別はない、始終の事情を聞いて、

禪師も打ちうなづき、

「ア、ア思えば世の中と云うものは皮肉に出来上がつてゐるものじやわい、生者必滅會者定離とやら、驕る者は久しからずじや。」

そこで斯う計らうてやろうと思うがどうじやの、この小判貳百兩は既に主が無いものも同然じやから、これを三島神社境内の柏の木の本根に埋めて置こう。そうして今日から百日先きの日の卯の刻を期して、再び俺しとお前達ち三人で定めの場合に立ち會つて廻る事にしよう。夫れ迄の管理は長四郎に頼むぞよ。尙ほお前達ちの身の上、并に將來の方針については一切をわしに任せよ、悪い様には取計らわぬ。」

と、納得させて立ち去ろうとするを引止め

「和尚様に改めて御願いが御座えやす。お聞きなすつてくんない、折角のお骨折りでわつち等が正業に立ち還ろうとする内にも、俺つちがお繩を頂戴したんでは萬事窮すでげすから、其所が何んとか成」

りますまいか。」

「オ、そうだ、良い所へ氣が付いたの、今一つの頼みと云うのは何んじやの」

「エ、夫れがあゝ和尚さまが、床置きに化けなすつた彼の魔法の秘傳でげすよ、是非あれを御傳授が願いたいもので御座います。」

「馬鹿な事を云うな、お前にあの秘傳を教えたなら、早速人を訛して金でも奪る種に使うのであらうがのう、それは斷じてならぬわい。」
「イヤモ一決して其んな悪事には使ひませぬ、實は昨晚和尚さまが柏の木の益栽から坐禪姿に正座された、其の瞬間の光々しさと云つたら、何んと譬えようがなく恰も地獄で如來さまを拜んだ様な感じが致しやした。それからと云うものは早く盜賊稼業を廢めて、和尚さまの弟子に成りたいと思うと、矢も楯も堪らぬ氣持ちになつてゐるんでございますよ。」

「オ、そうか、夫れは殊勝な事じやから、悪事にさえ使わなければ教えてやらぬものでもない。」

鍛練千日神となる、之れは禪學は原より一般人の間にも知られてゐる、石の上にも三年と云う金言じやが、うわの空では駄目じやぞえ。精魂を打ち込んでの行事としなければ、靈現とはならぬぞえ。依つて今日からは稼業の手障き時間を利用して一日の一時間乃至貳時間、一つ時の間、此の經文を手に、改心して柏の木の姿に成りたい、他に慾望は何にもない事を神に誓つて、時をも所をも構わず、一心不亂に念願せよと、經文を認め三人に手交せられた。

そして此の經文は不運のドン底に、即ち今にも首が飛ぶと云う斷末魔に遭つたら、最後の御願いと云つて役人に示せ。」
と、別れを告げて立ち去られた。

賊徒等三人は

「やれ／＼、ひどい目に會わされたわい、が併し彼の和尚の話を開かされてゐる内は、何んとなく氣が落ち付いて、胸がすくやうな氣持ちがするが」

と、語れば、子分の二人も異口同音に同調する。

まず當分は子分共にも神妙にさせて、和尚と再會する日を待つとしようかいと、評議一決した。

×

×

×

禪師は數日後江戸へ上つて、奉行や老中と會議し、あご長一味の情況と、改心後の前後策につき緊急協議を行い、柳生十兵衛先生にも彼の印籠を手交し、暫らく滞在する内にも山賊等の行動を見守ると同時に計畫を立案した。

百日の間を江戸に滞在諸般の打合せを行いたる上、再び三島に還られ定め場所に来て見れば、約に違はず彼れ等三人も所定の時刻に待ち受けていた

和尚さま今日は俺つち等の爲に態々御歸り下さいまして誠に有難う存じやすと、三人が丁寧に禮を述べた。

お前達ちも皆んな揃つていて、何よりの事じゃねー」

「之れと云うのも皆んな、和尚さまの御慈悲で御座えやすよ。實は六月上旬にお別れしてから、十日目にこの韋駄天に御用がかゝり、繼いで俺つちもお繩を頂戴しやしたので、所詮助からぬ運命と諦め舊惡を全部さらけ出しやして、既に打ち首と云う刹那に、役人から言い遣すこと有らば何んなりと云へ、聞き届けて取らずぞ、と云いやしたから、懷中から和尚さまから戴いた經文を差し出しました。すると打ち首待て、と云う聲が懸りまして、當分の間命は預かり置

く旨にて、二人揃つて歸して貰いました。今日日の目を拜がむことが出來ますのも、偏えに和尚さまの御慈悲と思い、毎日あの有難い經文を拜み續けて居りやす。」

「オ、そうであつたか、人を助けるは出家の勵めじゃ、是れからもお前達の仕合せのために、計ろうてやるぞよ。」

詢に有難き仕合せに存じやすと、そこで禪師と三人が立ち會いで三島神社境内の柏の木の根を堀れば、紛ふ方なき山咲色の黄金貳百兩が燦爛として現われた

「ア、ア目出度い／＼、之れでお前達の前途も明かるくなつたと云うものだ。」

「俺しも嬉しく思うぞよ、そこで將來の約束を固く結んで置きたいのじゃがねー」

「ハイ／＼和尚さまのお計い下さる事なら、何んなりとも異存は御座いやせぬ」

「では、わしの考えをこのように項目でつくつて書いておいたからとつくりみるがよい。」

一同、うや／＼しく、それを展げてみた。

一資本金貳百兩也

一富士の裾野、十里木地方を中心として開發事業を興すこと

一製品は旅行用大中小行李、辨當用行李、眞田打紐

一材料收集については山麓一帯に繁茂する篠竹、しのぶ、熊笹を初春より五月迄に刈り取り乾燥貯蔵すること

一十里木附近に細工小屋百坪位を建設し、倉庫並に職工百人を收容する

一江戸 三島、小田原に店舗を設け、行商をも行わしむ

一子分達を細工職に養生すること

一經營は質素を旨とし精勵に努ること

一食飼一汁一菜 一糞四泥定め、服裝は全員一定とすること

以上

禪師の崇高堅實なる指導方針は、長四郎の俊敏致密なる經營方針と克く合致した點から、經營井に事業運営を一任することにした。爾來禪師の指導方針を堅持し、日夜を分たず建設に努力し、工事一切の手間等は、一族でやつて不便を感じることなく、従つて建設資金は微少額にて完成する處となり、半歳を出でずして事業着手の運びとなつた。原料主産地は且つての山賊等が掠奪の際、追手の難を免がれるに屈強な、密集地帯の十里木を工場建設地として撰定した。

工場施設の十里木から開発に着手した地點を過去の惡を閉じて、善を開くという再生のしるしの楔を打ち込まれた。

原料は地元にて無盡蔵であり、手間は安く、良質品を安價で賣り出す強味を持つていた。

附近一帯に密集する熊笹は、壽司屋の装りとして、江戸の魚河岸で好評を博したから、飛ぶように賣れた、職工の心理状態も洗練されていくから怠け者は一人もいない。行李製品も良心的であつたから、賣れ行きも良好だつた。財力に恵まれていたから、經營に不安もなく、全員が楽しんで業に勵んだ。

開業三年目満願の日に當り長四郎は、禪師から教を受けた仙術の公開を行つたが、見事柏の木の盆栽姿に成功した。並みいる職人達も所長長四郎の熱誠によつて鍛練千日神となる、其の姿の氣高けさ

には、全員頭を下げて、感佩措く能はざるものがあつた。

惡人なりと雖、一朝改心する曉には、みほとけは吾れを救はれるものであることを、彼れ等は如實に體得することが出來た。

×

×

×

由來一つの事業を開拓、完成せしむるに當つては幾多の困難に逢着する事は周知の如くであるが、就中極惡人をして善導教化し、而かも産業人に切り代える事位い、至難な事業はないと心得える。是れ等は空前の社會福祉事業の一つであつたと考察する、本事業が着手以來比較的順調に進展を來たし、明治大正時代は文化産業であり昭和の大戦時代には軍需の梱包用に飛躍し、輸送の簡素化に役立ち終戦以來今日にも文化産業として、大衆の旅行用に家庭什器として發達してきた。而かも日本全國の主産地は今尚ほ御殿場であることから想起するに、白隠禪師の構想は國家百年の大計を、慶安の昔から今日あることを達觀せられた、偉大なる貢獻と言わなければならぬ。

さしも山賊の巢窟たりし箱根街道も雨來平穩に歸し、道行く人の旅情にも

馬子唄

「箱根八里は 馬でも越すが 越すに越されぬ大井川

と、のんびりとした馬子唄に耳を傾けながら旅人が旅をつづけた昔を偲び、峻峰たる箱根山を現代美化して、觀光の首位を誇る遊覽地に至らしめたのも、偏に

白隠禪師の教化の贈である。これは永遠に記念すべき尊い教訓である。

入亂曾木

泉湛田鶴

の大將となり肥後貞能を具し木曾勢を邀へ撃たんと、九條兼實の館東小路を経て多原方面へあわたとしく馳せ向つた。その勢、七八千騎、あるいは壹萬騎と噂されたが、兼實が、家僕をして密かに數へしめると、僅かに千八十騎にすぎなかつた。

義仲は、先遣隊として、北陸道の精銳五百余騎をえらんで太夫坊覺明につけると、覺明は江州源氏を語らひ、近江國潮の浦から漕ぎ渡つて坂本につき、叡山に登つて惣持院を城廓としてゐた。

かねて義仲と心を合せ氣脈を通じてゐた三塔九院の大衆一度に起つて、老若甲冑を帶び弓箭を携へて源氏に組し、講堂前に集合すと云はれた。

又、以王王の旗掲げの時に反平家の態度をとつた三井の園城寺は今度も源氏に多分に好意を示してゐた。

一方、義仲の叔父十郎行家は、大和國に入つて宇多郡に陣してゐたが、吉野諸院の法師等これに加擔すとの報が傳つた。行家の大軍今にも京へ攻め入ると聞へたので、先きに多原方面に向つた資盛貞能の追討軍は江州に赴かず、踵を返して行家の入洛を阻止せんものと、急いで京へ引き返して來た。又、知盛重衡の軍も山階から引き返して來た。

平氏強しと見れば平氏に従ひ、源氏強しと見れば平氏を去つて源氏に走るのが、自己の利のみを考へてゐたこの時代の通弊ではあつたが、かねて源氏に通ずとの風聞あつた平家側の多田藏人大夫行綱は、廿二日の朝、叛旗をひるがへして源氏に寝返つてしまつた。彼は、元々河内源氏であつたが、武威を振つて忽ち地方の豪族を従へ河内攝津の兩國の民衆、彼に參じてしまつた。

その頃、丹波方面に向つてゐた追討使忠度の軍勢も、敵對出來な

百戰百勝の輝かしい戰果に勝ち誇つた木曾勢五萬、京を目がけて押し寄せ上るとの報に、壽永二年七月廿一日、三位中將資盛追討軍

くて空しく大江山に後退してしまつてゐた。

一方、叡山は既に義仲の本陣地となつてゐた。

陣幕は風にはためき、白旗はひらめき動き、馬の嘶き軍兵のひしめき、四萬の精銳峯に谷にと充ち、雲を呼ぶ勢であつた。

明けて廿三日となると、平家の陣は歎息の色は濃い。平家の追討軍は、いづれの方面でも思はしい戦果を挙げ得なかつた。源氏の重壓がひし／＼と加はつて来る。急激な悲運である。逆浪のやうな木曾の猛撃に襲はれんとする容易ならぬ事態の急に六波羅邊は、重い憂ひに閉されてゐる。折から降しきる雨に沈痛の色が一層まして、焦心と斷腸の思ひはつきない。

廿四日は、からりと空は晴れたが、戦雲はしきりと動いてゐる。今夜源氏の夜打が行はれるとの風聞しきりに傳つた。いや今にも京中に市街戦あらうと、人々はおの／＼き恐れ合ふた。流言によつて街の騒ぎは大きくなり、庶民は、家財道具を運んで東へ西へと逃げかくれ、大路小路は、鼎の沸くが如く混亂した。

兼實も、自分の館の邊が戦場となる恐れがあると感じて、北の方を見して、ともかく法性寺へ難を避けた。

その日は、何の事もなく暮れたが、その夜、眞夜中のこと、後白河法皇は、按察使大納言資賢の子、右馬頭資時を召しつれ、ひそかに御所を出られ北面の武士僅か數名に守護されて、関として物音もない夜中のしづまの山路を、鞍馬へと御幸された。

鞍馬の寺僧は、法皇の夜中の突然の御幸に驚いたが、武力も十分でない山の事とて、若し平家の勢が押し寄せた時の危険もあつたので、

(こゝは、都に近うして、あしう候ひなんず)と申し上げたので、

更に叡山に登られ、東塔の南谷圓融房へ御幸された。衆徒も、近郷の武士も、それと知つて皆走り參じて、圓融坊御所を守護し奉つた。

平家が、主上、建禮門院を具奉し、三種の神器を具し奉つて、一門西海へ走つたのは、實にこの廿五日の朝のことである。

もうこれまでと思ひ定めて、都を落ちのくの余儀なきに至ると、萬斛の涙をのんで自らの手で、六波羅、西八條の家々に火をかけたのであつた。

平家の家々から火が揚ると、煙炎のうづまく中に、その未明からもう掠奪が初まつてゐた。

羅生門界限の浮浪者とか、叡山の下法師等は、命知らずにも火の中に争ひ入つて、平家一門が捨て、行つた家具、調度や雑多な品を、炎の下から手當り次第に擔ぎ出して退散して行つたのであつた。

かうした洛中の混亂と、煙炎天に満ちる中を公卿、殿上人は、家族をひきまとめて各地に難を避けてゐた。當然平家と運命を共にして西海へ落ちたと思はれてゐた攝政近衛基通は、人々の豫想を裏切つて一時紫野にかくれてゐたが、身の危険を感じてか、更に吉野の奥へと轉々と姿を潜めた。兼實の兄である松殿も山へ登り、女院宮は、八幡、加茂、嵯峨、太奈、西山のかたほとりに逃げ隠れ給ふた。法性寺へ避難してゐた兼實は、こゝも危険と感じて、先づ北の方等を奥の小堂邊に遣り、其の後、法印、僧、家人を伴つて堂へと隠れてゐた。

午后四時頃となると、防ぎあぐんだ平家の落武者が陸續と京に戻つて來た。肥後守貞能が、一矢を報ひようとの事だつた。今にも市街戦が行はれようとして、人々の畏怖は限りがない。

その中、街の様子を物見にやつてゐた家僕が戻つて來て、歸京の

武士が最勝金剛院に城廓を構築して討手の兵を引き受け一戦に及ぶらしいと、あわたとしく告げて來た。で更に、人を遣つて調べさせると、既に若干の兵が來てゐる事が明となつた。兼實も、周章せざるを得なかつた。北の方等を伴つて更に日野方面へと向つた。

この頃、木幡山に在つた攝津源氏は、稻荷邊に進駐して來て、早やほしいまゝな狼籍を初めてゐた。

戦勝に心驕つてか、これらの攝津源氏や、十郎行家の部下が、義仲の命を待たずに、なだれを打つて洛中に姿を見せると、所々に屯して威を張り出したのであつた。

彼等の乏しい間の憧憬の的となつてゐた都の華かさ、女の美しさを現實に目の前に眺めて、全身にうづくやうな武者振を感じた。その上、命を賭してこゝまで來た事だし、訓練も何の掟もない山がいの木曾軍の事とて、京の街を見て、忽ちに狼兵と化してしまつた。難を避けて逃げ去つた者が多かつたが、又都に留り残つた者も少くはなかつた。

木曾勢は、白旗を押し立て、民家に押し寄せ、

「以前、平家の門へ出入してゐたであらう」

「平家の人間を匿つてゐるに違ひない」

とか、殘黨狩りに名をかつて家々に亂れ入つて荒し廻つた。

家人を追ひ出し家財を掠奪するもの、藏を開いて財寶を勝手に持ち出す者もゐた。

中には飢えたる兵なのか、物を喰はんとしてゐる箸をも奪ひ取る狼籍に、口を空しくして命からゝ泣くゝ逃げ行く者もゐた。往來の守護兵は通行人を捕へ、着てゐる衣裝を剥ぎ肩に荷へる品を押へ、手に提げた所持品を倒して奪ひとるなどの亂暴狼籍を敢へてし

た。闇い路地からは、かどわかされて行くのか、女の悲鳴さへもれてゐた。

源氏來ると聞いて力強くも頼もしく思ひ、新しい曙光を迎へたとあれほど期待しよろこんだのに、こは又何とした事か、木曾の兵が洛中に姿を現はして後のやりたい放題の所業に、平家の時代には、六波羅一家といへば、六波羅殿と只恐れて目を見合すばかりであつたが、道には追剥が出なかつたのにと、喜び迎へた木曾の兵に幻滅を感じ魔魅のやうな跳梁に恐怖に挫かれ、軒々は口をとざしたまゝ、洛民の枕は安くはなかつた。

二

廿六日、夜が明けると、昨日歸京した武士が、最勝金剛院に陣を布いて一戦を交へると噂されてゐたのにどうした事か、今日は一兵の影すら見えなかつた。至る處敗北した平家軍の事とて、尋常の矢合せは覺束ないと思つたのか、逆浪のやうな木曾の猛撃をおそれたのか、それとも勝目のない戦に見きりをつけたのか、成す事なくして逃げ去つてしまつてゐた。

この醜態もない平家軍の有様に、兼實は玉葉で「歸京の本意未だその詮を知らず、武勇の彫弱、所行の尾龍、奇異の至り喩を取に物なし」と、平氏のていたらく、あきれたやうに批評してゐる。

街もいくらか平穩となつたので、兼實は潜れ家を出で法性寺へ戻つて來た。

すると、法皇山門に渡らせ給ふと傳へ聞えたので、午后の二時頃、登山のため行列を整へさした。

烏帽子直衣に裝を整へ、牛馬に乗ると、騒ぎの中の急な事とて舍

人も難色も随へず、僅か八人の騎の供人の先驅で道を急いだ。やがて西坂下に着いたが、坂道の上、狭くて牛車を通れない。仕方なく手輿を求めたが、仲々直ぐとは調達出来なかつた。待つ事久しくしてやつと無動寺法印の奔走によつて、輿と輿舁とが到着したのは、六時頃であつた。直ぐ手輿に乗り換へ、坂道を家人等は歩行で輿前を守つて、西坂へ登つて行つた。東塔南谷の青蓮院へ入つたのは、既に八時であつた。

暫く休息をとつて後、家人に明松メイソウを取らして、法皇の御所圓融房に伺候したのであつた。

日頃、兼實の凛たる人格、高潔なる見識を重んぜられてゐた法皇は、種々と御下問あつた。それについて兼實は、卒直に自己の見解を奏答した。

尙又兼實は、現下の政情に於ては、先づ木曾行家等の士卒の目に余る狼藉を停止せしめて早く二人を入京せしめ、其の後早速還御し給はらないと、京都の濫吹ランソウ止みますまいと奏上した。

法皇叡山に御潜幸なされたと傳へ聞くと、こゝかしこに隠れてゐた院の近臣公卿たちは、相前後して山へ登つて來た。馳せ參じた人々は、先づ關口松殿基房、近衛太政大臣、左右の大臣、内大臣、大納言中納言、其の他三位四位五位の殿上人等であつた。

圓融房の堂上堂下は、これら高官の人々で満ちあふれ、山門は近來にない大繁昌に衆徒等是有頂天になつてゐた。

廿八日、この日義仲は北より、行家は南から時刻を示し合せて晴れの入洛をする事となつた。

こゝ廿余年の間、絶えて見なかつた源氏の白旗が、へんぽんと都へ入つて來たのであつた。

源氏にとつて、この機がいかにかに待たれた事であらう。

「聞ゆる木曾の殿を見んものと」沿道には、見物人の山をなしてゐた。

威風堂々と入洛した義仲行家兩人は、蓮花王院の御所に參ずると平氏追討の事仰せ下された。兩人地に跪つてかしこみ承つた。

ところが參入のとき、相前後せず互に譲らうともせず、肩を並べ相並んで歩を進める態度に、二人の間に互に權を爭ふ鋭い對立の意趣がからみ合つてゐる事を、炯眼キョウガンにも兼實は看破してしまつてゐたのであつた。

三

廿五日の朝、洛中あんな騒ぎの中にあつても、一刻を惜しむやうに黙々と目を聖教の上に凝らしてゐたのは法然上人であつた。

信空と感西とは、庵の内をあたふたと取り片けてゐた。街の殺伐な空氣は、物靜かな東山の上人の草庵にもひたと押し寄せてゐたのであつた。

奪はれてはならない大切な品々は、既に山上阿闍房印西の坊に托してしまつてゐたが、聖教を入れた笈、笠、杖などを夫々用意すると、師の上人の傍へ左右から居寄つて

「師の房さま、木曾の目には、聖教の尊さを存ぜぬ山がいでありまする故、ともかく一時こゝを逃れさせ給へ」

「嵯峨は都へ遠く候へば、よもや彼處まで襲ふまいと存じまする。いざお伴仕りませう」

と、机上の聖教を奪ひ取らんばかりに焦り促した。他の弟子たちは既に思ひ／＼に難を避けてゐたので、跡に残つた二人は、上人の

身の上が氣つかはれてならなかつた。そんな中にも、火を放たれた家は、炎々と焰を吹き火は子の葉の如く降つて來た。

「平家か源氏か存じませぬが、火を放つたものと思はれまする。

街では源平の合戦が初まるものとおのゝきおそれて居りまする」

平氏が、都落に際して火を放つたため、その頃、京の街は動亂のルツボとなつてゐた。

外には、時ならぬとよめきが聞えた。雄叫びの聲が聞え、軍馬の馳け違ふ足音が大地をとどろかしてゐる。驚いた感西は

「いざ、早くお立ち召されよ」と、焦き立てた。

「否とよ」

上人は、頭を振つて尙も其場を動かうともせられなかつた。何等憶する色もない従容たる態度である。弘法のためには、迫り來る身の危険をかへり見て居られぬ思ひであつたのであらう。

「おゝ、あの女の悲鳴は、あれこそ武士が淺ましき己が欲を充さんものと、女童を捕へて縛めくものと思はれまする。早や木曾勢近くへ押し寄せたに相違ありません。こゝに居ては危険でございます。今佛門弘通のため、尊き御身、豺狼に等しき惡道な木曾の狼籍に逢つてはなりません」

日頃、こゝへ問法に來てゐる平氏の公達も少くはなかつた。平氏が日頃出入してゐたと知つたら、どんな狼籍をも敢てするかも知れない危険が十分感ぜられるのであつた。

信空は、上人の手を執り、感西は、机上から聖教を奪ふように取り上げてしまつた。

「御房よ、左様なことはせぬものよ。今一章だけよませ給へ」

微笑さへ浮べてたのむやうに云ふ、上人の顔には、何の畏怖の色

もない常の静けさである。

「眞觀の御坊よ、疾く聖教を笈櫃のうちへ藏はれよ。それほど御覽したく在せば、蟬峨にてゆるりと御覽したまへ。こゝに亂入した時は臍を噛むとも及びませぬ。最早や猶余はなりません。いざ直さま御伴いたしませう」

いよゝゝこゝもあふないと思つた信空は、今はぐづぐづしてゐる時でない、いざゝか言葉も荒だつた。

こんな中にも、若し狂暴な木曾勢が押しよせたら、どうならうかと、信空は焦慮し惴々としてゐた。

さすがに上人も、何時危険がとびかゝつて來るかも知れない世間の騒々しさと、政權の興衰、みにくい爭鬭のための兵火に禍されてゐる庶民のなげきに、しばし暗然と瞑目すると、弟子の眞情に動かされたのか、彼等の好意を無下に拒み切れなれないと思はれたのか、ぜひなげに文机の前を立たれた。

感西はつと笈を背に負ひ、上人は信空のせき立てるやうにすゝめるまゝに身支度を整へ、足ごしらへを確とすますと、相携へて庵を後にしたのであつた。

途中度々、源氏の兵に推何されながら西へ西へと足を速めてゐた。

晩年のこと、上人は、その日の事を險に見るが如き語調で、

「自分は、これまで一日とて聖教を見ない日はなかつた。だが、木曾の冠者花洛に亂入したとき、たゞその日、一日だけは、聖教を見ないでしまつた」

と、顔を暗くして、忘れ難い一日を、聖教を讀まず、あたふた一日を徒費してしまつたことを、さも口惜しさうに感を深くして、しみじみと、左右の弟子に述懐されたのであつた。

祖 德 諷 詠

裾 野 澤 田 岳 潤

春あさみ白梅ふゝむ花枝をみ影に手向けよゝとおろ
がむ

火の氣なきみ堂しんくゝと寒けくも祖師を懷えば身
内あたゝか

そのかみの今日のこの日に往生の素懷ましたるひぢ
り仰ぐも

ふくよかな墨染すがた尊かり世にませし日のおもほ
ゆるかも

今日はしも祖法然上人の忌日かな講中み堂に徳をた
ゝえて

僧ふたり御忌會修しけり佛燈はほのかにゆらぎ香は
たゆたふ

つゝましく一枚起請を講中は聲もほがらに唱和しに
けり

誦經はて講中にむかひ一向に唯念佛すべしと語りけ
るかも

念佛の聲するところ遺跡を宣らしましゝも此所に見
るかな

いまの世に祖師のおはせばいかばかり人の心は澄み
てありけむ

肉身は眼に見えざるも嚴然と尙生けるかに拜しける
かも

施本に

浄土トラクト

B6版
十六頁

竹中信常著

正信へのみちびき

現下新興宗教の功罪を論じ
そのヒロボンの病根を鋭く批
判すると共に、正しい信仰の
あり方を適切に指導する。

藤井實應著

一枚起請文

法然上人の全信仰の結晶た
る一枚起請文をば、懇切に解
説せられてある。

法然上人鑽仰會編

信徒必携

信者として之だけは心得お
くべきことがらが、教義から
行所作法に到るまで明示され
ている。

定價一部十圓、○十部以上八
圓、送料十部毎八圓増○五
十部以上七圓、送料五十圓
○百部以上送料當方負擔

芝園だより

○彼岸ともなれば、寺を中心に、
亡き人の菩提、供養の人の往き來
が繁くなる。目に見えたものだけ
に頭を下げるのでなくて、もつと

その背後にあるものを感じる心の
習慣というか、人生態度を、こう
いつた機会に、身にしみつけた
ものである。

○近頃、倫理課目の再検討がもり
あげられるが、之とても、もつと
大きな意味、換言するならば學ぶ
人の將來の人生觀という事を根底
にした人々によつて眞面目に考え
てもらわないと、君に忠、親に孝
という形式的道德になりかねない
であろう。

○我々は、とかく目先の事ばかり
考える政府役人の指導下の教育に
は、もつと批判的であるべきであ
る。

○この意味で、本號を以つて終る
鈴木大拙博士の文は得る所多いと
思われる。尙掲載にはNHKの高

瀬金澤兩氏の好意による。

○俳句の如是氏は、法然院住職梶
田信順師で、寫眞についても御世
話をかけた。

○最近ビルマインドから歸朝の正
大助教授壬生台舜氏から一夕、御
撮影の天然色スライドにて佛蹟其
他の模様を承わつた。今まで黒白
の寫眞では、そうまでも思わなか
つたものが、原色の寫眞でみると
全く佛蹟を見るような氣がして感
銘が深かつた。その一つ二つは、
黒白ながら四月號へ頂く事にお願
いした。

○本號も會員のページを設けまし
た。御投稿があればいつでも、こ
うしますから、どしどしお寄せ下
さい。たゞ歌等は當方で適宜取捨
致します。

○二月の教學院研究會は、二十六
日、大橋俊雄氏が「法然上人の經
濟生活」について發表された。

三月にビルマへ留學僧として出發
される人々の中に正大關係で五名
(龍海)

會費(誌代)

一ケ年 四〇〇圓
半年 二〇〇圓

但し維持會費は一ケ年千圓で
す。前金切になりますと精算
書を差上げます。御送金は安
全確實な振替にて願います。
送金の節は新規か、繼續かを
書入れ、又、新しい市は縣名
を記入して下さい。

「浄土」 三月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和三十年二月廿五日印刷
昭和三十年三月一日發行

(定價三十圓)

編輯兼 眞野 正 順
發行人

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

發行所 法然上人鑽仰會

振替 東京八二一八七番

特價奉仕

一、寺院用佛具類一式

一、在家用佛壇、佛具一式

多少に拘わらず御用命或は御紹介下さい

東京都江東區深川三好町一ノ五長專院不動寺脇

區役所前

正本堂佛具店

電話深川(64)五八四八

團體宿泊御案内

一、當寺本堂庫裡再建完了しましたので五十名位までの團體宿泊を實費で引受ます。

東京都江東區深川三好町一ノ五區役所前

長專院不動寺

正 本 實 業
電話深川(64)五八四八

幼稚園 運動遊具

全國幼稚園・保育園・小學校・各團體に、良品を廉價にのモ
ットで、堅牢安全な遊具を納入好評を頂いております。松管
・光明・芝・明照等の浄土宗幼稚園採用。



銀ブランコ2人乗	¥ 12,000
銀ブランコ3人乗	¥ 14,000
銀ブランコ4人乗	¥ 22,000
銀ブランコ6人乗	¥ 26,000
椅子ブランコ4人掛	¥ 13,500
太鼓橋	¥ 10,000
ジャングルジム中型	¥ 28,000
單式滑臺中型	¥ 23,000
複式滑臺中型	¥ 36,500
動物付き遊動木	¥ 30,000

此他各種、一報力タロク送

配達實費（都内横濱500圓以内
其他1000圓以内）組立無料。

小田原・熊谷・土浦以遠は丸通
送り、（荷造費當社・送料着拂）

組立説明書送付

篠澤鐵工所

東京都大田區堤方町718
電(75)1024（池上驛東3分）